

眷属の夜

【二】

気がつけば、カズオは広い社殿の中にいるのだった。カズオの前には、さっきまでのばあちゃんが、なんと今は白い狐の姿をして、立派な尻尾までたくわえて、ちんと座っている。飛び込んだのはお稲荷さまの小さな祠のはずだったが、その中がこんなに立派な社殿になっているとは思ってもよらないことだった。

カズオはあっけにとられてばあちゃん狐と広間とを、ただただ阿呆のように眺めていた。

広間には舞台があり、その真ん中に一匹の猫がいぼったようにして座っていた。オレンジがかった茶色の縞模様は、どこからどう見てもピー助だ。

「ばあちゃん、来い！」

ピー助は、甲高い声ではっきりとそういった。すると、ばあちゃん狐はいそいそと尻尾をふりながらピー助のそばに駆け寄った。

「お手！」

ピー助がそういうと、ばあちゃんは自分の前足をそっとピー助の前足に重ねた。ピー助はどうだとはばかりにニヤリと笑ってカズオを見た。そして、ヨシオのように得意そうにさらにいい放った。

「おまわり！」

まさか、ばあちゃん、それだけはやめてくれとカズオがきつく目をつぶった瞬間だった。

「わしら眷属の一家が揃い申した。大神さまへお目通りを」

野太い声を響かせながら入ってきたのは、カズオの父ちゃんだ。父ちゃんではあるが、尻のところからふさふさとした尻尾が出ている。その隣には、やっぱり尻尾をつけた母ちゃんが、ふたつになったばかりの妹を負い、いなりずしを山とのせた盆を持ち、少し遠慮がちに立っていた。ねんねこ半纏からのぞく妹の頭からは、小さな三角耳がのぞいている。

ばあちゃんにおまわりをさせようとしていたピー助は、少しあわてたように咳払いをしていった。

「大神さまはお忙しい。わしから伝えよう。して今宵の御用は？」

「今宵は戌（つちのえ）の午の十三夜。今年はまた稲の実りもよく、村の稲刈りも順調ですので、どうぞこのまま無事に今年の収穫がすみますようにと、このとおりに、お供えを携えお伺いした次第でございます」

「ふむ、ふむ、承知した。大神さまには、確かに伝えよう」

ピー助は前足をなめなめ、鷹揚にいった。カズオは、なんだピー助のくせに偉そうな、と面白くなかったが、ばあちゃんも父ちゃんも母ちゃんも、やけにうやうやしく頭を垂れているのだ。

「それから」

と、父ちゃんはいった。

「西の家のお産が近いが、見るところ、あれは逆子であります。どうか、産み月までには赤子がぐるんと回って無事に産まれてくるようお願い申す」

「西の家では犬を飼っているな。これはちと難しいかもしれん」

西の家といえばヨシオの家だ。そういえばもうすぐ弟か妹が生まれると楽しみにしていた。どうやらその赤ん坊の命にかかわる話らしい。カズオが用心深く聴き耳を立てると、三角の耳がぴくぴくと動いた。

「いんや、村の者たちがみな安寧に暮らしていくことが、わしら眷属の使命。その名誉にかけてもお願い申す。犬を飼おうがオウムを飼おうが」

「ふむ」

ピー助は前足をなめるのをやめ、目を細めていった。

「眷属の名誉か。今となっては貴重な者たちだ」

「まことに。わしらの存在がなければ、いかに大神さまであろうとも」

「しっ！ それ以上はいうな」

ピー助はあわててさえぎった。

どうやらヨシオの弟か妹は無事に産まれてこられるらしい。ヨシオは弟がいいといていたから、ついでに頼んでみようとも思ったが、横から声を出すのははばかられた。

それから父ちゃんはピー助に村のもろもろの頼み事をした。五つ目か六つ目になると、

「今日はもうここまでだ。そんなに覚えていられるか。大神さまにはわしからちゃんと話しておく」といってピー助は横になり、そのままピクリとも動かなくなった。

「さあ、わしらも帰んべ」

父ちゃんの言葉に促され社殿の広間を出ると、そこはもう鳥居のところだった。ばあちゃんは元のばあちゃんの姿にすっかり戻っていたし、父ちゃんと母ちゃんの尻尾も、妹の三角耳も消えていた。

「いい十三夜だなあ」

満足そうに月を見上げる父ちゃんにカズオはそっと聞いた。

「なあ、おらうちの家族って、ほんとは狐なのか？ だからおらうちは犬が駄目なのか？」

「狐なんかじゃあつかま。おらうちは千年以上も続く眷属の一家よ。人の世と神さまをつなぐ大事なお役目だ」

そういつて父ちゃんは満足そうに笑った。

「カズオー カズオー もう起きろー。学校遅刻すつつお」

母ちゃんの呼ぶ声で目が覚めた。半分起きて半分寝ている頭はぼんやりしている。変な夢を見た。すごく変な夢だった。ばあちゃんが狐になって、もう少しでピー助に「おまわり」をさせられるところだった。

「犬のことばっか考えてっからだな、きつと」

急いで着替えて顔を洗っていると、いつものように早くしろと母ちゃんがせかす。

「早くまんま食え。カズオの好きないなりずしだぞ」

窓のそばの日だまりでは、ばあちゃんが曲がった腰をもっと曲げて、ピー助に「お手」の練習をさせている。

ばあちゃんのさっぱかまには、白い毛が何本もついていて、日が当たるたびにきらりきらりと光るのだった。